

対先輩行動の構造の検討：対象となる先輩を特定して¹⁾

筑波大学人間総合科学研究科博士特別研究員 新井 洋輔

筑波大学人間総合科学研究科 松井 豊

The structure of behavior toward a *senpai* (higher status person): Specifying the *senpai* as target

Yosuke Arai and Yutaka Matsui (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This study seeks to examine the determinants of behavior toward a *senpai* (a higher status person in terms of age, knowledge, skill, experience in Japan) from a *kouhai* (opposite of *senpai*) within university clubs. A survey administered to 263 college students, consisting of scales of relationship factors (social power and intimacy) and behavior toward a *senpai*, asked about the relationship with a specified *senpai* and group factors (group-formality and group cohesiveness). The main findings are as follows: (1) The results of a principle component analysis suggest that six aspects of behavior have a circumplex structure around the two orthogonal axes of accept/reject and obedience/non-obedience; (2) Positive social power and intimacy influenced accept, legitimate power while group formality influenced obedience, and punishment power influenced reject.

Key words: interpersonal behavior, in-group behavior, behavior toward a higher-status person, clubs

本研究は、大学生のサークル集団において後輩から先輩に対して生起する行動（対先輩行動）の構造を検討するとともに、回答の際に想起される先輩を固定した場合に、集団状況の要因や集団内の2者関係の要因などの外的要因が、対先輩行動に及ぼす影響を検討する。

サークル集団研究の重要性と問題点

大学生のクラブ・部活動・サークル集団など（以後、サークル集団と記述）に関する、教育学・体育学・心理学的研究では、多数の学生がサークル集団に所属していることが報告され（内閣府政策統括官, 1997, 2001; 川端, 1998など）、所属大学にとどまらず広くサークル活動の場を広げていること（江刺, 1993など）が指摘されている。また、サークル集団に所属し活動することには、社会性の獲得や友人関係の構築などの機能があること（渡辺・高橋, 2002; 荒井, 1980, 1983など）が明らかにされている。このように、友人関係の構築や社会性の獲得などについて、サークル集団へ所属し活動することは重要な役割を担っていると考えられる。その一方で、サークル集団に所属する多くの学生が、活動内容だけでなく対人関係などに問題を感じてサークル集団から脱退したいと思っている（阿江・掛水・

1) 本論文は、2001年・2002年の社会心理学会で発表されたデータを再解析したものであり、本論文の内容は、2004年度筑波大学大学院心理学研究科博士論文に含まれている。

本研究の実施に当たっては、筑波大学の藤田純子氏、杉山東子氏、岡田有紀恵氏、太田保志氏、相川朋子氏、竹中一平氏、白石貴大氏、飯村北海氏、山本岳広氏、小川義史氏、三澤正志氏の協力を受けた。また本論文の執筆に当たっては、筑波大学人間総合科学研究科の丹野宏昭氏の協力を受けた。記して感謝の意を表します。

雨ヶ崎, 1997など) ことも明らかにされている。

これらの研究で指摘されているように、サークル集団の重要性と、対人関係に関する問題性から、サークル集団内の対人関係を対象とした心理学的な検討を行うことが必要であると考えられる。しかし、酒井・安藤(1998)は、大学生がサークル集団で築いている人間関係の実態を明らかにした研究が非常に少ないことを指摘している。さらに、体育学・教育学・心理学における研究を概観した新井・松井(2003)は、サークル集団を対象とした心理学研究では、年功序列規範やリーダーシップ研究などの集団状況に焦点を当てた研究が中心であり、サークル集団に所属する成員間の具体的な相互作用を扱った研究が少ないことを指摘し、成員間に生起する行動などの具体的な相互作用を検討する必要性を強調している。

先輩から後輩への行動がもつ側面

サークル集団内の成員間の具体的な相互作用を扱った研究には、新井(新井, 2004; 新井・松井, 2004)の、先輩後輩関係に生起する行動を扱った研究がある。

新井(2004)は、先輩後輩間に生起する行動のうち、後輩から先輩に対して生起する行動(対先輩行動)を抽出・分類している。大学生を対象とした3種の質問紙調査の結果から、対先輩行動には、「親交」「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」の6側面が見出された。同研究では、各側面の尺度得点について理論的中間点(「どちらでもない」の選択肢にあたる3点)と比較した結果から、親交、礼儀、参照は多く行われているのに対し、服従、衝突回避、攻撃はあまり生起していないことを明らかにしている。

新井(2004)の研究知見は、後輩から先輩に対する具体的な相互作用のうち、生起する行動という視点から、主要な側面を抽出していると捉えることができる。これらの行動側面の存在を確認し、さらに側面間の構造(それぞれの側面が相互にどのような関係にあるか)を明らかにすることは、対先輩行動についてより包括的に把握し、サークル集団内に生起する対人関係の問題を解決するための基礎資料になると期待される。

後輩から先輩への行動が持つ側面と構造

先輩後輩間に生起する行動の、側面間の構造を検討した研究としては、新井・松井(2004)による、

先輩から後輩に対して生起する行動(対後輩行動)に関する研究がある。

新井・松井(2004)は、2種の質問紙調査を行い、対後輩行動に13の側面(命令・注意、計画、配慮、指導、親交、攻撃・無視、同調・抑制、権力行使、回避、模範、上下回避、受容)を見出している。さらに、これら13の行動側面の相互関係を主成分分析によって検討した結果から、対後輩行動の各側面が円環的に布置されることを見出し、各側面を『親和-拒否』と『支配』-『非支配』の2軸の極とその中間的な位置からなる7つの行動群に分けた円環モデルに整理している(Fig.1)。この対後輩行動の円環モデルでは、『親和(親交、配慮)』と『拒否(回避)』、『支配(支配、権力行使)』、『非支配(上下回避)』とが直交する2軸の極として位置づけられ、さらに中間的な行動として、『支援(指導、計画)』、『攻撃(攻撃・無視)』、『受容(受容)』が、それぞれ位置づけられている。

この知見は、サークル集団内の先輩後輩間に生起する行動が、円環的なモデルによって整理可能であり、このモデルを用いることで行動側面間の相互関係を把握できる可能性を示唆している。新井・松井(2004)の知見は、対後輩行動の構造に関する研究知見であるが、本研究で扱う対先輩行動も、類似した円環モデルに整理しうる可能性がある。

したがって本研究では、対先輩行動の下位側面について、行動側面間の構造を検討し、新井・松井

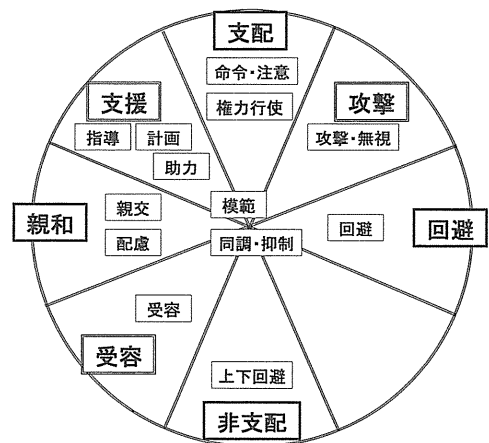


Fig. 1 対後輩行動の円環モデル(新井・松井, 2004)
注: □は各行動側面, ○はまとめられた行動群の解釈を示す

(2004)の対後輩行動に類似した円環的な構造が、対先輩行動においても見られるか否かを検討することを第1の目的とする。

先輩から後輩への行動に影響する要因

新井(2004)では、集団状況の要因や集団内の2者関係の要因などの外的な要因が、対先輩行動の各側面に及ぼす影響も検討されている。同研究では、集団状況の要因として、「集団フォーマル性(サークル集団がフォーマル集団の概念に近い程度)」や「集団凝集性」が、「集団内の2者関係の要因」として「社会的勢力」が、それぞれ取り上げられ、対先輩行動との関係が検討されている。

新井(2004)は、所属集団の集団状況とともに、「所属集団内の先輩に対して」行っている対先輩行動の頻度と、感じる社会的勢力とについて尋ねる質問紙調査を行っている(回答の際に想起する先輩は一人に特定されていない)。対先輩行動の6つの下位側面のうち、生起頻度の低かった「攻撃」を除いたパス解析の結果、「礼儀」と「服従」と「衝突回避」は集団フォーマル性と先輩の勢力の双方が高いほど生じしやすさに対し、他の側面は集団フォーマル性の影響を受けていなかった。また、「衝突回避」を除くすべての行動が先輩の肯定的勢力が高いほど生じしやすく、さらに「服従」と「衝突回避」は先輩の罰勢力が高いほど生じしやすかった。

以上の検討結果をもとに新井(2004)は、対先輩行動を、集団フォーマル性の影響を受けない水平関係の行動側面(親交)と、集団フォーマル性によって生起する上下関係行動(礼儀・服従・衝突回避)と、先輩からの肯定的勢力によって引き起こされる自発的な上下関係行動(参照)との3側面に、整理している。

以上のように、集団フォーマル性などの集団状況の要因と、社会的勢力という集団内の2者関係要因とは、サークル集団内の先輩後輩間に生起する各行動の生起頻度に影響することが明らかにされている。

したがって、これらの要因を扱い、対先輩行動との構造との関連を検討することで、集団状況要因と集団内の2者関係要因という二つの視点から、対先輩行動の各側面の性質について、さらに詳細な知見が得られると期待される。

そこで本研究では、対後輩行動と、集団状況要因や集団内の2者関係要因との関連を検討することを、第2の目的とする。

先行研究の課題と本研究の目的

新井(2004)は「集団内の先輩に対して」という質問形式を取っていることから、社会的勢力や対先輩行動に関する項目に回答する際に、集団内の先輩一般が想起され、対象が特定されていないという問題点が指摘される。そのため、新井(2004)において集団内の2者関係要因として取り上げられた「社会的勢力」は、厳密には集団内の先輩全般のもつ勢力として測定されており、2者関係の要因より集団状況の要因に近いものとして測定されていた可能性がある。

そこで本研究では、集団状況の要因と区別し、対先輩行動や社会的勢力を厳密に2者間の要因として測定するために、回答の際に想起する先輩を「親しい先輩」と「親しくない先輩」という2種の質問形式でそれぞれ特定して質問する。このように質問すれば、回答の際に想起される先輩は個人に特定され、社会的勢力などの2者関係要因の対先輩行動に対する影響がより厳密に検討できると期待される。さらに本研究では、対先輩行動に影響する集団内の2者関係の要因として、新井(2004)で検討されていた「社会的勢力」に加え、先輩との「親密性」を測定する尺度も新たに作成し、検討する。

本研究の目的は、以下のとおりである。

第1に、回答の際に想起される先輩を特定して、対先輩行動の「親交」「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」の6側面について、対後輩行動において抽出された円環的な構造が見られるか否かを、検討する。

第2に、これらの6つの対先輩行動の下位側面と、集団状況要因(集団フォーマル性と集団凝集性)や集団内の2者関係要因(社会的勢力と親密性)との関連を検討する。

方 法

調査対象は茨城県内の国立大学の学生263名(男性125名、女性138名で、このうち集団所属者は234名)であった。調査期間は2000年6月から2001年4月であった。調査は、筆者および協力者による個別配布と、講義の一部を利用した集団実施の2通りで実施した。回答はいずれも無記名で、所要時間は約20分であった。

質問紙 質問紙は、対象となる先輩を特定するために、(A)(B)の2種類作成し、回答者には無作為にいずれかの質問紙が配布された。(A)では「所属する集団の中で親しい先輩」について、(B)で

は「所属する集団の中であまり親しくない先輩」について、それぞれ回答を求めた。

以下に、本研究で分析に用いた項目を示す。

1. フェイスシート 回答者の学年、年齢、性別、所属大学および学部について、それぞれ単一回答形式で回答を求めた。

2. 所属集団に関する情報 以降の設問で回答の対象となる集団を一つに絞るため、もっとも関わりの深い、あるいは深かった集団（以下、「所属集団」と略記する）の種類について「体育会系運動部」「スポーツの同好会」「文化・芸術系サークル」「その他」の中から単一回答形式で回答を求めた（この設問は回答の際に想起される集団を固定するためのものであり、分析には用いていない）。なお、集団に所属していない回答者については、これ以降の質問への回答を行わずに、質問紙を返却するように教示した。

3. 所属集団の集団状況要因 所属集団の集団フォーマル性については、新井（2004）において作成された集団フォーマル性尺度10項目を用いた（Table 1 参照）。

所属集団の集団凝集性については、Evans & Jarvis（1986）の作成した、集団の魅力を測定するための「集団への態度」尺度（訳は西迫（1994）による）のうち、新井（2004）において最終的に採用された8項目を使用した。

4. 対象の先輩に関する情報 2で回答した所属集団の中で、1人の先輩（質問紙Aでは「最も親しい先輩」質問紙Bでは「あまり親しくない先輩」）を思い浮かべるよう教示し、明確に想起させるため、その先輩のイニシャルの自由記述と、学年・年齢・性別についての単一回答形式で、それぞれ回答を求めた（この設問は対象となる先輩を特定するためのものであり、分析には使用していない）。

5. 対象の先輩との親密性 山本（1986）の因子分析結果における「親密感」の項目をもとに、対象の先輩との親密性を尋ねる5項目を独自に作成した（Table 2）。各項目について、4で回答した先輩と自分との関わりにあてはまる程度を「そう思う」「少しそう思う」「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」の5件法で回答を求めた。

6. 対象の先輩から感じる勢力 今井（1996）の「社会的勢力認知尺度」を、対象を「その先輩」に替えて用いた。項目は6側面の順序を並べ替えて尋ねた。なお、解析に当たっては、新井（2004）を参考に、社会的勢力認知尺度をあらかじめ「肯定的勢力（賞勢力・魅力勢力・専門勢力の合成変数）」「正当勢力」「罰勢力」の3側面に整理した。

7. 対象の先輩への対先輩行動 新井（2004）で作成された対先輩行動尺度（親交、礼儀、服従、衝突回避、参照、攻撃）を用いた。新井（2004）において項目数の多かった「親交」「衝突回避」「攻撃」は項目を抜粋し、項目数の少なかった「服従」は尺度の意味に沿うように作成した3項目を追加して、「礼儀」「参照」はそのまま使用した²⁾。集団内でその先輩とどのように関わっているかを尋ねる57項目について、5件法で回答を求めた。項目は調査実施時に6側面の順序を並べ替えて尋ねた。

結 果

尺度構成

1. 所属集団の集団状況要因の各尺度 集団フォーマル性尺度は、新井（2004）に従って得点化した。本研究では、新井（2004）で得られた項目の信頼性について確認するため、主成分分析によって1次元性の確認を行った。その結果、第1主成分への負荷量が.40以上の項目は、10項目中8項目であり、寄与率は37.2%であった。第1主成分への負荷量が.40に満たない2項目を除去して再度主成分分析を行った結果、全項目の第1主成分への負荷量が.40以上となり、寄与率は45.4%に上昇したため、この尺度は1次元構造であることが確認された（8項目での結果をTable 1に示す）。

集団凝集性尺度については、新井（2004）と同様に尺度化した。

2. 親密性尺度 親密性尺度に関しては、独自に作成した尺度であるため、主成分分析を行って1次元性の確認を行った。回答は「そう思う」を5点…「そう思わない」を1点と得点化した後、主成分分析によって解析した。解析結果をTable 2に示す。

主成分分析の結果、候補となっていた5項目全てが第1主成分に.89以上の負荷量を示しており、累積寄与率は84.7%であった。この結果から、この尺度は1次元構造であると解釈された。

2) 「親交」尺度は「先輩に好意を伝える」を除いた11項目を用い、「先輩とは私生活では付き合わない」は、「先輩とは私生活でもつきあう」に文章を変更した。「衝突回避」尺度は「先輩が話すことには、興味がなくてももうなずいたり微笑んだりする」を除いた9項目を用い、「攻撃」尺度は「先輩を飲み会などのイベントに呼ばないことが多い」を除いた10項目を用いた。「服従」尺度は「無意味な命令でも、その先輩には従う」「その先輩には不愉快なことをされても黙っている」「その先輩に命令されたら雑用も引き受ける」の3項目を新たに作成し、計10項目を用いた。

Table 1 集団フォーマル性尺度の主成分分析結果と平均

集団フォーマル性	負荷量	平均
その集団には、組織としての明確な目的がある	.651	4.25
その集団のメンバー全員に、それぞれの役割が決まっている	.743	3.64
その集団には、明確な地位構造ができています	.725	3.31
その集団での規則は、文書になっている	.520	2.54
その集団のメンバーには、決められた仕事をする事が義務づけられている	.762	3.54
その集団では、どの仕事か誰の責任であるかが明確である	.680	3.56
メンバーがそれぞれ、組織の目標を達成しようとしている	.566	3.47
その集団には、はっきりとした命令系統がある	.695	2.99
固有値	2.184	

Table 2 親密性尺度の主成分分析結果と平均

項目	負荷量	平均
その先輩は話しやすい	.926	3.64
その先輩と気軽に付き合える	.940	3.33
その先輩には心が開ける	.892	2.88
その先輩といっしょにいると楽しい	.914	3.36
その先輩には親しみを感じる	.929	3.44
固有値	4.235	

3. 社会的勢力認知尺度 社会的勢力認知尺度に関しては、正当勢力、専門勢力、賞勢力、罰勢力、魅力勢力、参照勢力のそれぞれについて、今井(1996)にしたがって尺度化した。

4. 対先輩行動尺度 対先輩行動については、新井(2004)が対象を特定しない回答形式であったのに対し、本研究では対象を特定しているため、異なる構造が得られる可能性を考慮し、主成分分析により各下位側面の1次元性の確認を行った。回答は新井(2004)と同様の方法で得点化した後、「親交」「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」の下位側面ごとに主成分分析によって解析した。

解析の結果、「服従」「参照」「攻撃」の3側面に関しては、全ての項目が第1主成分へ.40以上の負荷量を示しており、寄与率はそれぞれ、服従が32.9%、参照が49.2%、攻撃が40.9%であったため、これらの尺度は1次元構造であると解釈された。本研究において新たに項目を追加した「服従」尺度の主成分分析結果を Table 3 に示す。

「親交」「礼儀」「衝突回避」の3側面については、第1主成分への負荷量が.40に満たない項目があったため、それらの項目を除いて再度主成分分析を行った。全ての項目が第1主成分に.40以上の負荷量を示すまで繰り返し分析を行った結果、寄与率はそれぞれ1回目の分析に比べて、「親交」が72.6%

に、「礼儀」が43.1%に、「衝突回避」が46.8%に上昇したため、1次元構造であると解釈された³⁾。

5. 各尺度の信頼性と平均 本研究における各尺度の項目数、平均、 α 係数を Table 4 に示す。全ての尺度は、全項目の合計点を項目数で割ったものを尺度得点とした。尺度得点が高いほど、集団フォーマル性、集団凝集性、先輩との親密性、先輩に感じる勢力、先輩に対する行動が、それぞれ高いことを示す。

各項目の α 係数は全て.70以上であり、十分な信頼性があると判断された。

対先輩行動の各尺度の平均を理論的中間値(「どちらでもない」に当たる3.0)と比較するt検定を行った。その結果、「礼儀」は3.0より有意に高く、「親交」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」は3.0より有意に低かった(いずれも $p < .01$)。

対先輩行動の性差 対先輩行動の各尺度について性差の検定を行った(結果を Table 5 に示す)。「攻撃」は男性のほうが女性よりも有意に多く行っており($p < .01$)、「礼儀」は女性の方が男性よりも有意に多く行っていた($p < .05$)。

対先輩行動の構造 対先輩行動6側面(「親交」「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」)の構造を明らかにするため、6側面の尺度得点に関して、主成分分析を行った(結果を Table 6 に示す)。

解析の結果、成分2までの累積寄与率は63.9%であった。成分1の負荷量を横軸、成分2の負荷量を

3) この手続きにより除外された項目は、「親交」尺度の「その先輩と顔を合わせないようにしている」、「礼儀」尺度の「その先輩との会話が途切れないようにする」、「衝突回避」尺度の「その先輩の批判をしない」であった。

Table 3 服従尺度の主成分分析結果と平均

服従（#は新規項目を示す）	負荷量	平均
その先輩といるときは仕事を率先してやる	.547	2.86
その先輩の使い走りをする	.600	1.79
無意味な命令でも、その先輩には従う#	.697	2.03
その先輩の仕事を先輩の代わりにする	.587	2.11
その先輩の機嫌を損なわないように気を使う	.529	2.89
その先輩には不愉快なことをされても黙っている	.411	2.64
その先輩にさそわれたら断らない	.538	2.55
飲み会の席で、その先輩のお酒が無くなったら注	.458	2.98
その先輩に命令されたら雑用も引き受ける#	.672	3.08
その先輩の荷物を持つ	.640	1.78
固有値	3.298	

Table 4 各尺度の項目数・平均・ α 係数

変数名	項目数	平均	α 係数
集団フォーマル性	8	3.41	.82
集団凝集性	8	3.95	.93
親しさ	5	3.33	.95
肯定的勢力	12	4.24	.92
正当勢力	4	3.90	.72
罰勢力	4	2.87	.84
親交	9	2.54	.95
礼儀	6	3.81	.73
服従	10	2.47	.76
衝突回避	8	2.57	.83
参照	9	2.65	.86
攻撃	10	1.98	.83

注：社会的勢力認知尺度は理論的に1点から7点に分布し、その他の尺度はいずれも理論的に1点から5点に分布する

Table 6 対先輩行動の尺度得点に関する主成分分析の結果

	成分1	成分2
親交	.415	.839
礼儀	.715	-.334
服従	.850	-.156
衝突回避	.593	-.613
参照	.660	.597
攻撃	-.033	.241
固有値	2.193	1.629

Table 5 対先輩行動の各尺度に関する性差のt検定の結果

	性	N	平均	SD	t値 (df)
親交	男	103	2.60	0.96	-0.280
	女	101	2.64	1.06	(202)
礼儀	男	102	3.77	0.65	-2.203
	女	103	3.96	0.60	(203) *
服従	男	102	2.42	0.60	-1.157
	女	103	2.53	0.69	(203)
衝突回避	男	103	2.56	0.73	-0.081
	女	101	2.57	0.80	(202)
参照	男	102	2.55	0.76	-1.909
	女	103	2.76	0.77	(203)
攻撃	男	103	2.12	0.69	3.242
	女	103	1.83	0.59	(204) **

** $p < .01$, * $p < .05$

縦軸とした2次元平面に、6尺度を布置した結果が、Fig.2である。

集団状況要因や集団内の2者関係要因と対先輩行動との関連

対先輩行動と集団状況要因、集団内の2者関係要因との関連を検討するため、以下の手順で分析を行った。

最初に、Fig.2に示した対先輩行動尺度の得点に対する主成分分析の成分1と成分2の主成分（個人）得点を算出した。次に、この尺度得点と、集団状況要因（集団フォーマル性、集団凝集性）、2者関係要因（親密性、社会的勢力）との各尺度との相

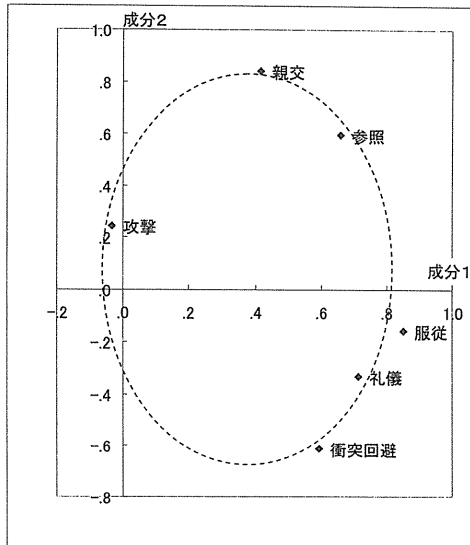


Fig. 2 対先輩行動の主成分分析結果のプロット
注：点線は、行動側面のプロットに沿って描いた仮想円

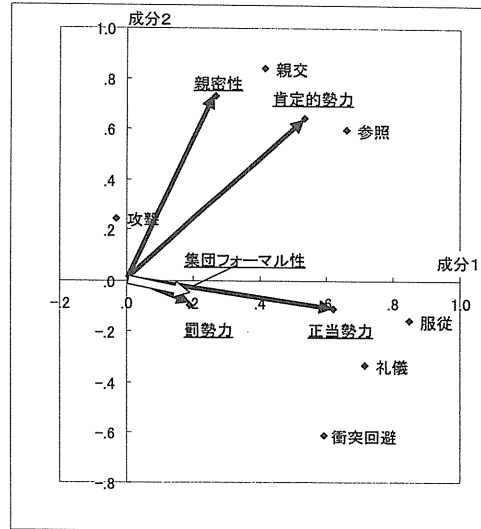


Fig. 3 対先輩行動と各尺度との関連
注：下線は外的要因に関する各尺度を示し、ベクトルは各尺度と成分1と成分2との相関係数を示す（白抜き矢印は集団状況要因、黒矢印は2者関係要因）。

Table 7 対先輩行動尺度の主成分得点と各尺度との相関

	成分1	成分2	N
集団フォーマル性	.16*	-.05	199
集団凝集性	-.04	.04	199
親密性	.27**	.73**	200
肯定的勢力	.53**	.64**	199
罰勢力	.19**	-.10	200
正当勢力	.62**	-.11	200

** $p < .01$, * $p < .05$

関を算出した (Table 7)。

集団状況要因に関わる2尺度 (集団フォーマル性、集団凝集性) は、集団フォーマル性が成分1と有意な相関を示し、集団凝集性は、いずれの成分とも有意な相関を示さなかった。

集団内の2者関係要因の尺度 (先輩との親密性、社会的勢力の各尺度) は、全ての尺度が成分1と有意な相関を示し、親密性尺度と賞・魅力・専門勢力尺度が成分2と有意な相関を示した。

各尺度の成分1と成分2との相関係数について、Fig. 2のプロット図に重ねてベクトルとして表示したものを、Fig. 3に示す (有意な相関を示した変数のみ)。

集団フォーマル性のベクトルの方向をみると、「礼儀」と「服従」の方向を示していた。集団内の2者関係要因の各尺度が示す方向をみると、親密性

尺度は、「親交」の方向を示しており、賞・魅力・専門勢力の合成変数である肯定的勢力は「親交」と「参照」の中間の方向を示していた。正当勢力は「服従」の方向を、罰勢力は「衝突回避」の方向を、それぞれ示していた。

考 察

本研究の目的は、以下の2点であった。

第1の目的は、対先輩行動の「親交」「礼儀」「服従」「衝突回避」「参照」「攻撃」の6側面について、対後輩行動にみられたような円環的な構造が見られるか否かを、回答の際に想起される先輩を特定して検討することであった。第2の目的は、これらの6つの対先輩行動の下位側面と、集団状況要因 (集団フォーマル性と集団凝集性) と集団内の2者関係要因 (社会的勢力と親密性) との関連について、検討することであった。

対先輩行動の側面

対先輩行動の対象を特定していない新井 (2004) と同様に、下位側面ごとの主成分分析の結果から、対先輩行動の6側面が確認された。各行動側面の生起頻度について新井 (2004) と比較すると、「礼儀」は一貫して高く、「服従」「衝突回避」「攻撃」は一貫して低かった。新井 (2004) では検討されていな

い性差については、「攻撃」は男性のほうが女性よりも有意に多く行っており、「礼儀」は女性の方が男性よりも有意に多く行っていた。

対先輩行動の構造

主成分分析の結果から、対先輩行動の6側面には円環的な配置が見られた (Fig. 2の点線で示した仮想円)。行動の意味内容を考慮して配置を解釈すると、先輩の言うことに従う「服従」と、礼儀を守って先輩を尊重する「礼儀」とが近くに布置されことから、これらは『服従』的行動であると解釈される。また、先輩と親しく関わる「親交」は『親和』的行動であると解釈される。本音を言わずに先輩と表面的なかかわりしかもたない「衝突回避」は『回避』的行動であり、先輩に従わず、反抗する「攻撃」は『不服従』的行動と解釈される。また、参照は相手に対する好意に基づいて相手の性質を受け入れる行動 (『参照』) であると解釈される。

Fig. 2において、近くに布置された行動は類似した性質を有し、離れて布置された行動は類似性が低いと解釈される。Fig. 2に点線で表記した仮想円において、「参照」は、「親交」よりやや「服従」「礼儀」に近い位置に布置されていることから、『親交』と『服従』の双方に近い性質を有する行動であると解釈される。また、『服従』と『不服従』、『親和』と『回避』はそれぞれ離れた位置に布置していることから、反対の意味をもつ行動と解釈される。

以上の解釈をもとに、対後輩行動の円環モデル (Fig. 1, 新井・松井, 2004) と同様に、対先輩行動をモデル化したものが、Fig. 4である。

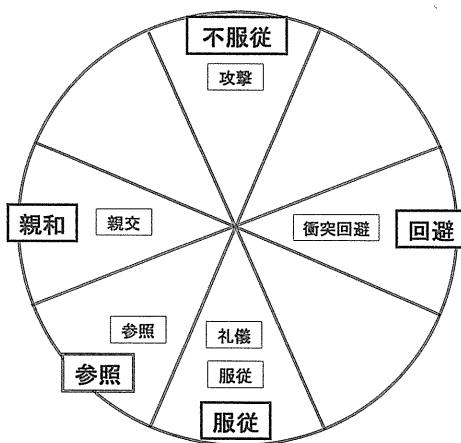


Fig. 4 対先輩行動の円環モデル
注：□は各行動側面，○はまとめられた行動群の解釈を示す

Fig. 4に示したように、対先輩行動は、『服従 - 不服従』と『親和 - 回避』とを軸とする、円環的な構造を有していると解釈される。

外的要因との関連

外的要因との関連 (Fig. 3) について、集団状況要因と集団内の2者関係要因に分けて考察する。

集団状況要因のうち、集団フォーマル性は『服従 (服従, 礼儀)』の方向を示していた。この結果は、集団フォーマル性の高い集団においては服従行動が多く不服従行動が少ないことを示している。この知見から、集団内の階層構造や規則や役割が明確な集団においては、『服従』行動が後輩の役割として求められていると解釈される。

集団凝集性については、いずれの成分とも有意な関連は見られなかった。

集団内の2者関係要因のうち、親密性と肯定的勢力とは、いずれも『親和 (親交)』の方向を示していた。したがって、『親和』行動は、先輩に対して親密さや好意的な勢力を感じているほど生起する好意的な行動であることが明らかになった。

正当勢力は、『服従 (服従・礼儀)』の方向を示していた。したがって、先輩が自分に対して命令することを正当なものとして認めている場合には、集団の階層構造が明確である場合と同様に、服従行動が取られることが明らかになった。

罰勢力は、『拒否 (衝突回避)』の方向を示していた。したがって、本音を言わずに先輩と表面的なかかわりしかもたない行動は、勢力の点からみると、先輩から望ましくない行動をされる場合に生起する否定的な行動であることが明らかになった。

以上の各外的要因に関する結果は、各側面の行動内容の解釈と主成分分析結果の布置をもとに作成された対先輩行動の円環モデル (Fig. 4) が、集団状況要因 (集団フォーマル性) や集団内の2者関係要因 (親密性・社会的勢力) の観点からも整合していることを示している。

本研究の課題

本研究の課題として、本研究で扱った行動は対先輩行動に関する結果であるため、サークル集団内の先輩後輩間行動と外的要因との関連を明らかにするためには、対後輩行動と外的要因との関連についても検討する必要性が指摘される。

また、新井・松井 (2004) における対後輩行動の構造に関する検討と、本研究や新井 (2004) における対先輩行動に関する検討においては、対先輩行動と対後輩行動とを別箇に検討しているため、相手の

特定の行動に対して、先輩や後輩がそれぞれどのような行動を生起させるかという、双方向的な行動の関連は検討課題として残されている。したがって、集団状況や勢力などの視点だけでなく、時系列的な追跡調査などによって、2者の生起させる行動の関係を検討する必要性が指摘される。

引用文献

- 阿江美恵子・掛水通子・雨ヶ崎俊子 (1997). 本学競技者に関する研究 (4) - エリート競技者の心理的問題に関する分析 - 東京女子体育大学紀要, 32, 16-25.
- 荒井貞光 (1980). スポーツクラブの6つの機能に関する研究 日本体育学会第31回大会号, 220.
- 荒井貞光 (1983). スポーツクラブの6つの機能に関する研究 (2) - メンバーと地域住民間のクラブ像についてのギャップ - 日本体育学会第34回大会号, 132.
- 新井洋輔 (2004). サークル集団における対先輩行動：集団フォーマル性の概念を中心に 社会心理学研究, 20, 35-47.
- 新井洋輔・松井 豊 (2003). 大学生の部活動・サークル集団の研究動向 筑波大学心理学研究, 26, 95-105.
- 新井洋輔・松井 豊 (2004). サークル集団における対後輩行動の構造 筑波大学心理学研究, 27, 29-41.
- Evans, N.J. & Jarvis, P.A. (1986) The Group Attitude Scale: A measure of attraction to group. *Small Group Behavior*, 17, 203-216. (西迫成一郎 (訳) (1994). 研究と測定 廣田君美・藤澤等 (監訳) 集団凝集性の社会心理学 - 魅力から社会的アイデンティティへ - (Pp.39-61) 北大路書房)
- 江刺正吾 (1993). 女子学生と課外活動 大学と学生, 335, 11-15.
- 今井芳昭 (1996). 影響力を解剖する - 依頼と説得の心理学 - 福村出版.
- 川端雅人 (1998). お茶の水女子大学大学生の課外活動に関する研究 - 運動クラブについて - お茶の水女子大学人文科学紀要, 51, 187-202.
- 内閣府政策総括官 (総合企画調整担当) (2001). 日本の青少年の生活と意識 (第2回調査) - 青少年の生活と意識に関する基本調査報告書 -
- 酒井 朗・安藤めぐみ (1998). 課外活動に見る現代大学生の人間関係 お茶の水女子大学人間発達研究, 21, 1-15.
- 渡邊義行・高橋雄一 (2002). 岐阜大学教育学部学生 of サークル所属に関する調査研究 岐阜大学教育学部研究報告 (自然科学), 26(2), 23-31.
- 山本真理子 (1986). 友情の構造 東京都立大学人文学報, 183, 77-102.

(受稿3月22日：受理5月18日)